

あとがき 八尾の天台院と今東光

作家・今東光(1898~1977)の軌跡を語るときに外せないのが、天台宗の僧侶としての姿です。東光は1951(昭和26)年に、八尾市中野(現在の西山本町)にある紫雲山天台院に住職としてやってきました。天台宗僧侶としては最高位の「大僧正」にまでのぼりつめた、立派なお坊様です。

東光の愛した天台院とはどのような寺院だったのでしょうか。

私はこのごろ、天台院は徳川家康のブレーンとして知られる怪僧・天海大僧正が再興させた寺院ではないかという仮説を立て、調査を進めています。先日、ご住職様のご許可を得て天台院に伝わるご位牌を調べたところ、天海の弟子である念海の名が記されていることが分かったからです。天海は、天台院の本寺(末寺を管轄する寺院)であったと考えられる、大阪の天台宗を代表する寺院・天鷲寺(大阪市天王寺区)の住職を務めました。そのときに、八尾にも弟子・念海を赴任させて、大阪での天台宗の勢力を広げようとした、とは考えられないでしょうか。

八尾は、古くから大和と河内を結ぶ陸路の要地であり、紀伊(熊野や高野山)へ参詣する街道でもありました。つまり、経済・文化・交通の要衝だったわけです。そういった重要な地に、切れ者の天海が着目した――。八尾の歴史から考えれば、当然の結果でしょう。

明治の廃仏毀釈のなかで衰退した天台院を、昭和になって再び盛り上げたのが、われらが今東光です。天海から東光へ――、八尾の魅力はますます増していきます。(大阪経済大学講師 辻晶子)



天台院で晋山式を行う 昭和27(1952)年

【企画展示情報】

今東光と関西文化人たち ～昭和30年ごろを中心に～
前期:令和8年5月12日(火曜日)まで
後期:令和8年5月16日(土曜日)から9月13日(日曜日)まで
※最新の開館状況、注意事項等はホームページ等でご確認ください



「今東光資料館だより」の
バックナンバーはこちらから

KON TŌKŌ MUSEUM

今東光資料館だより 冬
令和8(2026)年2月 No.6

編集・発行:今東光資料館 tel.072-943-3810
〒581-0003 大阪府八尾市本町二丁目2番8号
八尾図書館3階



「今東光と関西ゆかりの文化人たち」

以前の資料館だより(No.2)の「生誕100年司馬遼太郎さんと今東光」のコーナーで、当時をご存じの山本明代さんからお話を伺いました。今回はそれについてふれてみたいと思います。

昨年、「テント劇場」(昭和32(1957)年5月~7月サンケイ新聞朝刊 東光連載小説)の挿画の多くを故・中村眞(真)氏のご遺族から寄贈頂きました。それらの原画と、その部分の新聞紙面を資料館で順次公開していきます。

昭和32年といえば、東光が直木賞を受賞したばかり、意気盛んだったことは容易に想像がつかます。当時の紙上には、こう紹介されています。

…その題材の奇抜さ、円熟の筆致は、他の追随をゆるさぬところで、とくに本紙のために練りに練った今回の野心作「テント劇場」は、(略)

関西に根をおろし、関西を愛する作者は、舞台を関西に設けるのは当然のことで、それだけ読者の親近感もひとしおと思われます。さし絵は、今氏と名コンビのモダン・アート協会会員の中村真画伯が斬新の境地をひらいて情趣ゆたかな彩筆をふるいます。今氏の登場を大いにご期待のうえ、ご愛読をねがいます。(昭和32(1957)年5月4日サンケイ新聞)

ふたりをひきあわせ、のちに「テント劇場」の小説・東光&挿画・中村眞(真)のタッグを提案したのが、以前の資料館だよりでご紹介した「未生」編集長の國田彌之輔氏だったと、山本さんは回想しています。

そうして今回は、機会をあらためて、と考えていた「資料館だよりのお話の続き」を企画展示(前期)としてご紹介しています。(なお、後期展示は「テント劇場」の小説作品にスポットをあてていく予定です。)

後に同編集長を引き継ぐことにもなる山本さんの周りでは、中村氏はじめ多くの文化人たちが、公私ともに「仲間」となって関西の文化芸術の様々なシーンで重層的に関わっていたことがわかります。ぜひ資料館にお立ち寄りください。(岡本)



「テント劇場」連載 11 回目、楽屋 (三) の挿絵

「何等かの機縁で知り合うということは、何等かの因縁のしからしむるところだ。」

今東光は若い頃、逆境の中で多くの文豪や芸術家と巡り会い交流していきます。

昭和26年、東光(53歳)は八尾の天台院に赴任後、僧侶・直木賞作家(昭和32)としてまるで、水を得た魚のようにエネルギーに活動し文壇のみならず、宗教、経済、芸術、芸能界など様々なジャンル、多くの人々と出会いながら交流を深めていきます。

昭和34年発行の「東光金蘭帖」は、文壇で出会い交友の深かった人々を著述しています。そこから今回は「畏友」川端康成との邂逅を一部引用しています。

…「東さんやないか」

声をかけられて、よく見ると、トラ公こと池田麗進という友達だった。彼は神戸一中から一高を受験して補欠で入学した。僕は人生に対して半信半疑で暮らしていたような男だったが、この時ばかりは「運命」というものを感じずにはいられなかった。(略)

このトラ公と同室だったのが川端康成だった。

川端は茨木中学を経て一高に入学したのだが、彼の故郷は摂津とはいいながら河内とすれすれのところだ。早く両親を失って祖父に育てられた。(略)

僕は川端を知ってから、この男こそ^{ふんけい}剗頭の交わりをすべき人物だと感じた。一高でも目立った学生ではなかったが、彼を知る人は必ず一目置いていた。重厚な人柄が他の推重するところであった。…

「東光金蘭帖」について川端は書評でつぎのように称賛しています。

…この「金蘭帖」ほど、今君の豊美の本来と、今日の大をなした成長とを、おのづから明発した書はあるまいと思ふ。ここには今君の若い日の師友十六氏が生彩縦横に、今君現在の第二の青春の光圓のうちに描かれて、今君自身のかつての青春とともにその人たちもよみがへる。… (「東光金蘭帖」中央公論社 昭和34年11月)

静謐な美を追求したノーベル賞作家「静の川端」と、自由闊達・毒舌和尚「動の東光」。正反対の二人でしたが、20歳頃に出会ってその親交は、川端が亡くなるまで生涯にわたって続きました。(木村)

(現在、企画展は昭和30年ごろ「今東光が出会った人々・今東光と関西文化人たち」中村真(真)、三岸節子、司馬遼太郎、鳥海青児、八木一夫、谷崎潤一郎、鴨居羊子、岩宮武二、藤沢桓夫等、画家・作家・デザイナー・写真家たちとのエピソードを紹介しています。)



参議院議員全国区にて当選(70歳)川端康成が選挙事務局長を務める昭和43(1968)年(写真提供:樋口典子)

東光余聞 No.6-文:伊東 健

『翻譯という植え替え』

現在放送中のNHK朝の連続テレビ小説「ぼけぼけ」では小泉八雲ことラフカディオ・ハーンとその伴侶となったセツの半生が描かれています。

小泉八雲の生きた時代は、元号では嘉永3年から明治三七年で、明治三二年生まれの今東光はまだ少年期にさしかかったばかりで、八雲との面識もありませんでした。

その東光が、小泉八雲の業績を紹介するために原書を読みこなし、まだ全集のなかった小泉八雲の文章を翻訳し、世に出したのが「小泉八雲随筆集」(写真(大正一五年



五月一七日人文會出版部発行)です。東光はその序文で、以下のように書き残しています。

僕は日本近世文學の成長を談ずる度に、必ず二人の思想界の偉人の名を逸したことがない。一人はケーベル先生で他の一人はラフカディオ・ハーン先生である。若き日本の文學は此の二人の偉大な思想家によって善導され、影響を受け、裨益された。而もケーベル先生に就いては、その高弟等によって充分なる感謝の意を盡された。けれどもハーン先生に就いては何故か、傳記的にばかり徒らに高名で、誰も先生の譯本

を試みる人さへない。従って英文の讀める人を措いてこの記憶されなければならない先生の文章を知らない人が多いのである。

吾々よりも幾時代も前の、さうして若き日本の文學を背負つて立つた當時の青年等は、幸にして親しくハーン先生の講義に接することが出来た。さうしてまた幸ひに英文の讀み得る人々も亦、先生の名文に接するの機縁を掴み得る。しかしながら之は必ずしも先生の意のあるところではないだらうと思ふ。

何故なら、先生はラフカディオ・ハーンであることよりも小泉八雲であることの方を、より喜ばれた。してみると、此の偉大なコスモポリタンの文章が、日本語に植え替えられてこそ初めて先生の本来の存意を明らかにするものではないだらうかと、僕は思ふ。(後略)

※原文に即し、旧字体で引用しています。当時の気分を味わってください。(ルビは筆者)

翻訳することを「日本語に植えかえる」と表現した東光はこの時二十八歳。すでに菊池寛と喧嘩わかれていました。偉大なコスモポリタンと評する小泉八雲の文章を紹介できる喜びがこの書籍にはあふれていて、翻訳した各隨筆に関連する解説のような前書きが添えられ、周辺情報もわかるような仕掛けになっています。この時期に前後して刊行が始まった小泉八雲全集が広まることもあってか、東光の訳業も忘れ去られていきますが、かなり早い時期から小泉八雲の仕事に注目していた東光は小泉家のご遺族から出版の許諾を得たことも明らかにしており、東光の情熱が詰まった一冊となっています。